

ねずみの冒険

小川未明

青空文庫

一匹びきのねずみが、おとしにかかりました。夜中よなかごろ天井てんじょうから降りて、勝手かたてもとへ食べ物たものをあさりにいく途中とちゆう、戸とだなのそばに置おかれた、おとしにかかったのです。空腹くうふくのねずみは、あぶらげの香かうばしいにおいをかいで、我慢がまんがしきれなかつたものでした。ねずみは、そのせまい金網かなあみの中なかで、夜よるじゅう出口でぐちをさがしながら、あばれていました。夜よが明あけると、ねまきを着きた、この家の主人いえのしゅじんが、奥おくからあらわれました。

「大きいねずみだな。こいつだ、このあいだから、そこらをガリガリかじつたのは。」

主人しゅじんは、しばらく立たって見みていました。

「どうしてくれようか。」

ものぐさな主人しゅじんは、自分の手てで殺ころさずに、ねこに捕とらえさせることを考えかんがました。それで、ねずみの入はいったおとしを下さげて、
外そとへ出でました。

寒さむい朝あさで、路みちの上うへは白しろく乾かわいていました。前まえ側がわの商しょう店てんの

小僧こぞうさんが、往おう来らいをはいていました。

「大おおきいやつが、かかりましたね。」と、ほうきを持もつ手てを休やすめて、ながめていました。

「ねこは、どうしました。」

「ねこですか？ さあ、どこへいったか見みえませんよ。」

「こいつをどうしようかな。」

「水みずの中なかへお入れなさい。」

「水みずの中なかへか。」

主人しゅじんは考えかんがこんでいました。バケツに水みずを入れなければなら
ない。おとしのはい入おほる大きなバケツでなくてはならぬ。それから、
死しんだねずみの処しよち置おしなればならぬ。いろいろのあたまことまが頭あたまに
浮うかんで、めんどろくさくなつてしまいました。

「バケツに水みずを入いれて、つけたらいいでしょう。」と、小僧こぞうさん
が、いいました。

「それがさ、やつかいなことだ。外そとへ出だして、なぐつたら死しぬだ
ろう。」

「それは、死しにますがね、ふたを開あけたら、逃にげやしませんか？」

「それもそうだ。よほどうまくやらなければな。」

こんな話をはなしして、あちらから、自動車じどうしゃのブウ、ブウという、警笛けいてきの音おとがしました。ものぐさな主人しゅじんは、即座くざにいいことが思おもいついたのです。自動車じどうしゃにねずみをひき殺ころさせようとしたのでした。

「これは、名案めいあんだ。」

主人しゅじんはぐるぐるとおとしを、ふりまわして、中なかのねずみに、目をまわさせました。そして、自動車じどうしゃが近づちかづいたときに、ちよくるまうど車くるまの下したになりそうなところを見みはからつて、ふいに、ねずみを出だしました。

おどろ驚おどろいたのは、ねずみよりも自動車じどうしゃの運転手うんでんしゅだったのです。

正しょうたい体のわからぬ、黒くろいものをひいてはたいへんだと思おもつたのでしよう、にわかにはハンドルを曲まげて、避さけようと思いました。だが、あまり急きゆうなために調ちようし子が狂くるつて、片かたがわ側の店てんとう頭こへ突つつ込んで、ガラスト戸どを破はかい壊いしたのです。

主しゆじん人も、小僧こぞうさんも、ねずみどころの騒さわぎでありませぬ。そのほうに気きを取とられている間あいだに、ねずみは、どこへか逃にげてしまつたのでした。

助たすからぬ命いのちと思おもつたねずみは、また天てん井じ裏うらのすみかに帰かえることができました。しかし、ねずみは、これによつて、人にんげん間かんというものは、自分じぶんたちのとうてい考かんえつかぬ不思議ふしぎなことをするものだと思おもいました。とにかくここに長ながくいてはいけなかんいと感かんじ

たのです。ちようど、この屋根から、裏の空き地を横切つて、あちらの倉庫の屋根へ、電燈線がつづいているのを発見しました。

「そうだ、この電線を渡つていけば、あちらの家へ、移ることができるのだ。」

ものぐさの主人を、てこずらせるほどの、元気なねずみですから、電線を渡つていこうと、冒険を決心しました。

人間が気のつかない昼ごろのことでした。ねずみは、一本の電線を渡りはじめました。落ちそうになると尾をくるりと針金に巻きつけて、体を支えました。

鳥や、獣物のすることは、人間のごとく、そうしくじりが

ないものです。しかし、だれもいないと思つたのがそうでなかつた。空^あき地^ちに勇^いくんと賢^{けん}二^じくんが、すずめをさがしていたのです。しかも打^うつことの上^{じょう}手^ずな賢^{けん}二^じくんは、空^{くう}気^き銃^{じゆう}を持^もつていました。

「あつ、ごらん、ねずみがあんなところを渡^{わた}つている。」と、先^{さき}に見^みつけたのは、勇^いくんでした。すずめが電^{でん}線^{せん}に止^とまつていると思^{おも}つたのが、あにはからんや、ねずみでありました。

「ねずみがこんなことをするかなあ。」と、賢^{けん}二^じくんはこれを見^みて、むしろあきれていました。

「賢^{けん}ちゃん、打^うつのは、およしよ。」

「ああ。」

賢二くんは、これを打つのはなんでもなかったが、ねずみのこの健気な冒険に対して、じやまをする気持ちになれませんでした。

「渡ったら助けてやって、おつこちたら打つといいね。」

勇くんは、こういいました。賢二くんは、だまって、ただ、ねずみの渡るのを身動きもせずじつと見守っていました。ねずみは、おどろくべき注意力をもつて、とうとう渡りおわつて、あちらの赤い屋根へつきました。このとき、思わず、二人は、手をたたいて、ねずみのために、成功を祝したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学四年生 17巻12号」

1940（昭和15）年3月

※表題は底本では、「ねずみの冒険《ぼうけん》」となっています。

※初出時の表題は「鼠の冒険」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ねずみの冒険

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>